

未来はとて
も

輝
い
て
い
る

ふわっとしたノリと設定のお話なので、
ふわっとした感じでお読み下さい。

虎杖悠仁が本日二件目の任務を終えたのは、昼飯時をかなり過ぎた時間だった。

この後は呪術高専本部に行き、月末定例の活動報告をする予定を入れていたのだが――。腹は減っているし高専は今いる場所から遠くに行くのが面倒だし、メールで済ませてしまおうか……と考えた矢先、ここ半年ほどずっとそんな調子だった――任務完了報告も定例報告も電話やメールのみで済ませてしまっていた――せいで、いい加減顔を出さないと減給だと先日事務方に脅されたばかりだったのを思い出し、溜め息を吐く。

呪術界はいつだって人手不足だ。等級に見合わない任務でも普通に投げて寄越される。

虎杖の現在の等級は一級なので、こなすのに苦労するような任務はもう滅多にないけれど、とにかく割り振られる任務の数が多い。週に一回丸々一日休める日があればいい方で、予定では全休となっても、いきなり呼び出されて半日潰れるなんてことはざらにある。呪術師にとって『週休二日』などというものはほとんど都市伝説なのだ。

ほんと、どれだけブラックな業界だよ……と独りごちながら最寄り駅へと向かう。学生の頃は当たり前だった補助監督による車での送迎も今はなく、基本は電車やバスの公共機

関での移動だ。

正面から歩いてくる女性の肩に低級呪霊が憑いているのが見えて、擦れ違いざま、周囲に気づかれぬように軽く指を弾いてソレを祓った。大勢の人間が集まる駅などではこういうことがよくある。

宮城から出てきて、呪術高专に入学したのが十一年前。人と呪霊が混在している場面など、虎杖にとってはもう日常風景になってしまった。

東京の端の端、そして山の中にある呪術高专は寒い。

十一月下旬の今、平野部ではまだコートが必要なほどではないが、平地との気温差が軽く五度くらいはありそうなここに来る時だけは、もう羽織物が必要かもしれないと思う。

パーカー部分に首と顔の半分を埋めながら小走りで校舎へ向かって屋内に入ったけれど、建物自体が古いせいか無駄に広いせいか、はたまた珍しく人の気配が少ないせいか、廊下は外の温度と大して変わらず寒かった。

目的の職員室兼補助監督事務室の扉を開けると、中から流れ出てきた温かな空気にほわりと包まれて、寒さで強ばっていた体から力が抜ける。

その部屋の中央にはデカい応接セットが置かれていて、誕生席の一人掛けソファに五条

悟の姿を見止めた。

「あ、五条センサーきてたの？ 久しぶり！ よかった〜ここまで来た甲斐があつた〜！」
虎杖は上がったテンションを隠さず上機嫌に五条へと話しかける。高専関係者からは目隠し馬鹿だのチャランポランな軽薄野郎だのと散々な言われ方をされている男だが、出会った十一年前から五条は虎杖が尊敬してやまない最強の呪術師だ。

「派遣先でたまたま恵に会ってね。定例報告に高専に行くって言ったから僕もついでに〜
と思つて」

「あ、そうなんだ。伏黒もお疲れ」

丈の長いソファの、五条から遠い端に座っていた伏黒恵にも愛想よく声をかけたが、こちらにはあからさまにシカトされた。

うっわ、カンジ悪っ!!

ていうか、おまえそれちよつとオトナゲなくない?!

いつもは伏黒に言われがちな台詞を脳内のみで愚痴つて、なにこともなかったかのよう
に五条の斜め横の一人掛けソファの方に座る。

「おやおや、ケンカ中？」

「いやー、まあ、ちよつと……？」

虎杖がオトナな対応で流そうとしているのに対し、伏黒は依然そつぽを向いて虎杖を無視だ。

——いつもは五条先生に揶揄われるのを嫌がるくせに、今揶揄われるネタを提供してるのは自分じゃねえか。

苦笑いとともに溜め息が漏れる。久しぶりに五条に会えたことは嬉しいが、本当は虎杖だって和やかに会話を続けたい気分ではなかった。

五条の言った通り虎杖と伏黒は喧嘩中だった。それも近年稀に見るほどの大喧嘩を繰り広げた後で、まだ仲直りをしていない状態である。

というか……、仲直りをするべきかどうか、虎杖にはちよつとわからないのだ。

喧嘩の原因は「別れ話」で。

切り出したのは虎杖の方で。

話し合いをする余地もなくキレだしたのが伏黒の方で。

ふたりの普段からの関係性を知っている人間は誰一人信じそうもない展開と状況だった。その大喧嘩をしたのが約一週間前である。それから顔を合わせていなかったのはもちろん、電話もメッセージのやり取りも一切ナシだ。

万年人手不足なことも手伝って、等級がそれなりに上位の呪術師は単独の任務が多く、

且つ全国各地へ飛ばされる。今日のような偶然を除けば、意識的に会おうとしない限り呪術師同士が顔を合わせる機会はほとんどない。

同じ呪術界にいる限り、今後一切関わりを持たないなんてことはできないが、関わりを「極力減らす」ぐらいなら可能だろう。

つまり伏黒が、このように虎杖を無視し続けるのなら好都合なわけで。

このままフェードアウトもアリかもしれない——、などと卑怯な考えが頭を過ぎった瞬間、それまで頑なに虎杖から顔を背けていた伏黒がギロリと睨みつけてきた。

「テメエ……ふざけんなよ」

「え、なに伏黒、俺の頭の中読めてんの?!」

「テメエの考えることなんて大体想像つくんだよ! このへタレが!」

「ちよ、おまえ、この間から俺に対してヒドくない?!」

「酷いのはどっちだ!」

事務室に自分たちと五条しかいなかったせいで、応接テーブルを挟み、なんの懼りもなく大声で諍いを始めたふたりを眺めていた五条が笑いながら零す。

「もうすぐ三十路なのに、ふたりとも元氣だねえ」

五条のその呟きに「あと四年もあります!」とふたり同時に返してしまい、「仲いいじ

やん」とさらにまた笑われた。

そんなことより、だ。

いつの間にか五条の片手にはスマホが握られていて、そのスマホの背面はずっと自分たちの方に向けられている。

「ねえ先生、もしかしてムービー撮ってる?!」

虎杖の言葉でそれに気づいたらしい伏黒が、というかそれまで周りの状況に気づかなかつた伏黒も珍しいのだが、五条からスマホを奪うべく手を伸ばそうと——する前に。

「静まれ」

五条がパチンと指を鳴らした。途端、がちりとロックを掛けられたように体が動かせなくなる。向かいにいた伏黒も同様で、眉間に皺を寄せ、横目で五条を睨みつけている。

「キレて大声で怒鳴ってる恵とか、珍しすぎてまじウケる」

ピロリン♪ と動画撮影終了の音をさせた後、五条は両手とスマホを上着のポケットに突っ込んで、長い足を組み替えながらソファに深く座り直した。

いえいえ伏黒はわりとしょっちゅうキレてますよ? とか、どうでもいいからその動画消しやがれ! とか、虎杖が、そして恐らく伏黒が、言いたい言葉が声にならない。

「面白いネタは撮れたけどさ、そろそろウルさいから痴話喧嘩はそのくらいにしてよ。あ、

もしかして悠仁のその頬の痣、恵がやったの？ 恵、いつから武闘派になったの？」

虎杖の左頬はほんのり薄く紫色に変色している。これも五条の言う通り、一週間前の大喧嘩の時に伏黒に殴られたのだ。拳で。一週間経ってもまだ痕が消えないほどの強烈な打撃だったわけだが、伏黒は始め手を組み合わせて式神を呼び出そうとしていたので、さすがにそれはマズい、死ぬ、確かに俺は宿儻とほぼ一心同体で半呪いみたいなもんだけど、禊うのはまだ待って！ と頼みこんでグーパンにしてもらえたのはラッキーだったと言える。言える……と思う。……たぶん。

とにかく伏黒は昔からバリバリの武闘派ですよ。いつか五条先生殴るっていつも言ってますし。これも昔から。——とも言いたかったが、依然喋れない。

「ああ、ごめんごめん。それじゃ答えられないか」

五条が人差し指の先でチョイつとなにかを弾く仕草をすると、顔面辺りの筋肉の強ばりだけがフツと解けた。

「センサー……」

「ん？」

「口しか動かないんだけど」

「ん。暴れられると面倒だからまだ止まってて」

「えー……」

「それで、喧嘩の原因は？」

その質問には伏黒の方がすぐに反応を返した。

「五条先生に相談するつもりはありません」

「まあ訊かなくてもわかるけどさー」

「じゃあそのまま放っておいてください」

「恵ってほんと頑固だよねー、悠仁」

「それには全力で同意します」

「黙れ虎杖」

「そういうトコも嫌になったのかな？」

さらつと五条が爆弾を投下する。

え、待つて先生、喧嘩の原因は訊かなくてもわかるってさっき言つてたよね？ 実は全然わかつてなくない？ そういうトコ「も」ってなんだよ、そういうトコもどいうトコも伏黒をイヤになつてるトコなんか全然ないよ！ でもやっぱり別れなきやいけないんだつてば！ もろもろの理由で！ ということを誤解なく伝えたかったのだが、如何せん言葉が足りなさすぎた。

「違う違う！ ぜんっぜんイヤになってない！」

「だってさ、恵。よかったね」

「そんなことわかってます。……だから別れねえって言ってんだろぅが」

「いや、だからそうじゃなくって〜」

嫌いになったのだと、一言言えれば苦労はない。

口先だけでも言えないから、言いたくもないから、虎杖は困っているのだ。

「センチ、俺もバカなりにいろいろ考えたんだよ……」

「悠仁、バカが頭使うと熱出るよ？」

「センチどっちの味方なの?!」

「僕は中立。だからここはひとつ、ふたりとも初心に帰ってみればいいと思うんだよ」

「え？」

「は？」

毎度のことながら、五条は彼独自の理論と独特なペースで物事を進めていく。周りの者は大抵置き去りだ。五条のことは尊敬しているし憧れてもいるが、こういうところは十一年付き合っても未だに理解できないし、ついていけない。

「てことで、はい、いってらっしゃい」

行くつてどこへ?! と虎杖と伏黒が口にする前に、五条が両手をパンつと打ち鳴らした。その瞬間、自分の足下の床がなくなつた。というより事務室全体の床がなくなつてぽっかりと巨大な穴が開いた。全身にガンつと強い重力が掛かり、急にもの凄い力で下に引っ張られる。内臓が全部口から出てしまいそうならいの激しい浮遊感に、酷い眩暈もプラスされた。遊園地のフリーフォールは嫌いじゃなかったが、この強制落下は好きになれそうもない。

真つ暗闇の中に超高速で落下していく感覚は、どんな凶悪な呪いと対峙した時よりも悍ましく、不安で恐ろしかった。

——それより伏黒は？ 無事なんだろうか……？

遠くなる周囲の気配と薄れていく意識の中、「一時間ほどで戻れるからね」という五条の呑気な声だけが耳に届いた。

白昼夢から覚めたような感じ、とても言うのだろうか。

ハッと気づいた時には、虎杖は高専の寮の見慣れたドアの前に立っていた。目を瞬かせながら周囲を見回すも、広く長い廊下にいるのは虎杖ひとりだ。

ついさつきまで高専の職員室兼補助監督事務室にいたかどうか、自分以外にも伏黒と五条がいたはずだとか、その五条が手を叩いたら急に床が抜けてデカイ穴に落ちただとか、自分の理解を超えた現象はとりあえず横に除けておく。

素早く現状を分析し把握して慎重に行動——というのは性に合わないのだ。「まず行動」のモットーに従って、虎杖は目の前のドアをノックした。

ドア横の小さなプレートに書かれている、少し右上がりな『伏黒』の文字。馴染みのあるその名前を見ただけで、ここが「どこ」であろうが「いつ」であろうがまあ大丈夫、と思えてしまった。

再度ドアをノックすると、部屋の中から無愛想な「はい」が聞こえてくる。暫く待ってもまだ開けてもらえなかったので、今度は強めに叩いて「早く開けて」をアピールした。

「しつこいんだよ！ いつもはドア叩いてすぐ、返事も聞かずに入ってくるじゃねえか」
不機嫌丸出しな声は聞き間違えようもなく、虎杖のよく知っている伏黒恵の声だ。ただ、開いたドアから現れた顔は、さっきまで見ていたものよりもほんの少しだけ「懐かしい」伏黒の顔だった。

「……どちら様、というか虎杖……の親戚？ ……は確か亡くなったお祖父さんしかいなかったはずだけど」

虎杖を見て、一瞬目を見開いて、デフォルトの仏頂面に戻る。眉間の皺と疑問混じりな台詞が、伏黒のちよつとした混乱と警戒を示していた。

訪問者が自分の予想していた人物と同じようで微妙に違った、そんな奇妙な出来事にも大して動揺してなさそうなのが伏黒らしい。

「うん、親戚じゃなくて本人。虎杖悠仁……です」

「……にしてはちよつと歳食ってませんか？ 俺の知ってる虎杖悠仁は十六なんですけど」
「てことは伏黒も十六？ 今十一月だから誕生日前だろ？」

「はあ」

「そりゃ十六のおまえからしてみればオッサンだろうけどさ。俺だってまだ二十六だよ。この頃の五条先生より若い！」

「それ、大して変わらないでしょ」

「いやいやいやいや」

「とりあえず部屋の中に入ってくれませんか？ 誰かに見られたら面倒な気がする」

「でも寮のこのフロア使ってたの、俺とおまえだけだっただろ？」

「……まあ、そうですけどね」

同学年の紅一点だった釘崎は女子が集まった別棟だったし、自分たちの一年後に入学してきた数人の男子生徒も別フロアの部屋に入ったはずだ。空室はたくさんあったので部屋は選び放題だった。虎杖の部屋は伏黒の隣りと、五条に勝手に決められたけれども。

コタツだのテレビだのゲームだのを持ちこんで雑多になっていた当時の虎杖の部屋と違い、伏黒の部屋は元からあった勉強机とベッドしかないシンプルな部屋だ。もちろんソファのようなものはないから、虎杖が勉強机の椅子に座り、伏黒がベッドに座る。

備え付けの本棚にびっしりと並んだ本を見て、そういえばこの頃、伏黒はどういうわけか俺の部屋でよく本を読んでいたよなあと懐かしく思っていたところで、「それで？」と伏黒が切り出した。

「五条先生ですか？」

「あ、わかる？」

「こんなことするの、……ていうかこんなことできるの、あの人しかいないでしょう」
「だよな」

状況を整理すると、今この部屋にいるのは二十六歳の虎杖と十六歳の伏黒である。

十一月下旬のある日、二十六歳の虎杖は高専の事務室から、五条のなんらかの術式によって十年前に飛ばされたのだ。十六歳の伏黒からすれば、十一月下旬のある日、突然二十六歳の虎杖が部屋に訪ねてきた、である。

俗に言うタイムスリップだ。

因みに、意識だけでなく虎杖の体ごと過去に飛んできているので『タイムリープ』ではない。今、この時、十六歳の虎杖もちゃんとこの世界に存在している。

そして高専の裏山で二十六歳の伏黒と会っている——という記憶が、突然ポンツと頭の中に生まれた。

「そっかー。十六の俺が二十六の伏黒と会ってたあの時、十六の伏黒は二十六の俺に会ってたわけだな」

「俺にとっては初めての記憶ですけどね」

「一時間くらいで戻れるよ」とは言ってたけど、他人をタイムスリップさせるとかさあ、最強呪術師ってネコ型ロボット並になんでもできちやうの？　ほんとすげーよな」

「それ、ネコ型ロボットに失礼じゃないです？ あんなに可愛げないでしょ、あの人」

「伏黒って昔から五条先生への当たりがキツイよね……」

ただ、伏黒が五条への賞賛に嫌そうな顔で悪態を吐いても、それは五条の力を否定しているからではない。

タイムスリップだったり空間のワープだったり、世間一般の人が経験してみたいと夢見るようなことが、呪術師をやっているとそれほど特別なことではなかったりする。というか、五条悟といると、言うべきだろうか。超常現象的なことも摩訶不思議な出来事も、だいたい『五条悟の術式のせいだ』で納得してしまう、または済まされてしまうようなところがあるのだ。

だから今回虎杖も、十六歳の伏黒も、それほど慌てたり狼狽えたりしていないのだろう。ほんと、慣れすぎてすごい。

「これが五条先生の仕業だってことはわかりましたけど、じゃあ、あの人がかんなことをした理由はなんですか？」

「……………それ訊いちゃう？」

当然と言えば当然の質問である。

虎杖からしてみれば一番突っ込まれたくない部分で、答えにくい質問であったが。

正直に答えるなら、「今から十年後の、お付き合いをしている虎杖と伏黒が別れ話で喧嘩になって、見かねた五条がふたりを過去に飛ばした」である。但し、過去に飛ばされた理由は虎杖にもちよつとよくわからないので、厳密に言うところ「やつぱりよくわからない」なのだ。

「えーと、その質問に答える前に一つ訊いておきたいんだけど、今の…十六の俺とおまえとて…どうなってる？」

「はい？」

「つまりその…、仲がいい？」

十六歳の秋頃というのは、確かふたりの関係が微妙な頃だった気がするのだ。十六歳の時の虎杖が伏黒を好きだったことは確かだが、十六歳の間のどの瞬間に、どうやって付き合いだしたのかをはっきり覚えていない。

今、この時の伏黒にもし、男と付き合う（この場合十六歳の虎杖とのことだが）という考えが微塵もなかったとしたら、「君は男と付き合える部類です。そして付き合った結果、未来で拗れます」と教えるのもどうかと思うわけで……。

不躰な質問の意図がわからないからだろう、めちやくちや不機嫌な顔で答えられた。

「まあ、仲はいいと思いますけど」

「それって……恋愛的な意味で？」

「はつきり言った方がよさそうですね。付き合ってますよ。恋愛的な意味で」

「そ、そっか……」

遅かったか、という台詞はどうか堪えた。「おまえはもう少しデリカシーを覚えろ」
は十年間、いや、出会った頃からだから十一年間、伏黒に言われ続けていることだ。

「俺と虎杖が付き合っていることが今回のことに関係あるんですか？」

「まあ……、うん。ある。……ぶっちゃけると、別れ話で喧嘩になったから」

驚いたように眉を上げたのはほんの一瞬で、伏黒はすぐ真顔に戻る。

「なるほど。因みにどっちが別れようって言ったんです？」

「……俺」

「それで俺が別れないってゴネて喧嘩になったんですか？」

「……………まあ、そんな感じ」

「へえ」

伏黒にとってあまり気分のいい話の流れではないと思うのに、まるで他人事のように
淡々と事実確認のみをしてくる。大人のくせに歯切れの悪い答え方しかできない自分がち
よっと情けなかった。

「事の経緯はわかりましたけど、結局、五条先生がなんでこんなことをしたかはわからないままですわね」

「うん。それが俺にもよくわかんないんだよな。飛ばされる前、ふたりとも初心に帰って見たらうって言ってたんだけけど。十六歳の伏黒に会って、俺とは付き合うとか今すぐ別れるとか説得してこいつてことだったのかな？」

大人の方の伏黒がダメでも若い方の伏黒ならなんとか説得できるだろう？ ということだったんだろうか。でも、それなら伏黒まで過去に飛ばす必要はないし、五条が中立たたというのもおかしいし……、とブツブツ言いながら首を捻る虎杖を見て伏黒が小さく笑っていた。本当に、どちらが大人なのかわからない。

「それはちよつと違うと思いますけど……。そもそも別れ話の原因はなんだったんですか？」

「や、やっぱりそれも訊いちやう？」

「そりゃ訊くでしょ。別れ話でゴネるとか、自分がそんなクソ格好悪いことした理由が知りたい」

「いや、伏黒はぜんぜんカッコ悪くなんかなかった！ 昔も今もすげー男前で、すげーカッコいいよ?!」

「じゃあそんな男前でカッコいい俺を、なんで振ろうとしたんですか？」

「う……」

「納得いくことだったら、今の俺、すぐに虎杖と別れるかもしれませんよ？」

「うう……」

もう完全に伏黒のペースだ。昔も今も口で言い争いをして勝てたことはないし、話し合的なものをするとは大体上手く丸め込まれる。ただ、虎杖の疑問や不満が解消するように毎回ちゃんと説明してくれるので、しこりや蟠りが残ったことは一度もない。

一週間前のあの喧嘩の時は、話し合いにすらならなかった。それだけ伏黒の怒りが強かったということだろう。虎杖の事情や心情を、汲み取ったり気遣ったりする余裕がないくらいに――。

それでも今回は虎杖だって引くわけにはいかないのだ。熱を出しそうなほどいっぱい考えて悩んで出した結論だ。取り付く島もなかった二十六歳の伏黒とは違って、幸い十六歳の伏黒は虎杖の話聞いてくれるらしい。

十六歳の自分には申し訳ないが、十年後に拗れる前に、ここできっぱり振られてもらうべきなのだろう。

一度大きくゆっくり深呼吸をして、ベッドに座っている伏黒の顔を見据える。

「最近……釘崎が結婚した」

「へえ、それはめでたいですね！ 相手はどんな——とか、この場合、訊いてもいいのかな？ 出会いが無いっていつも喚いてるから、十年後でも、相手が見つかってよかったです」

今日一番の笑顔で、というより今まで虎杖もほとんど見たことがないような笑顔で、本当に嬉しそうに伏黒は言った。

いや、確かに釘崎の結婚はめでたい。めでたいのだが、釘崎を祝福する一方で、虎杖は複雑な気持ちにもなったのだ。

「自分と付き合ったら伏黒は幸せな結婚ができない——、とか思いました？」
さっきまでの嬉しそうな笑顔を苦笑いに変えて、伏黒が首を傾げる。

「……思った」

「十年付き合ってる、今さらじゃないです？」

「地元の友だちが結婚した時は、ただ『おめでとう』って思っただけだったんだけどな。

釘崎がみんなに祝福されて、すげー幸せそうにしてるのを身近で見たら、なんかちよっとダメだった……」

「二十六の俺、結婚したいなんて言っていました？」

「言ってなかったけど……」

「でしようね。自分がこの先結婚したがるとも思えないし。それに、男同士で付き合ったら普通にぶつかる問題ですよ、それ。てことで、それを理由に別れようって言われても当然『却下』です」

肩をちよこんと竦める仕事をただけで軽く流されてしまった。

そして、まさかそれだけじゃないですよ？ と、さらに視線で促される。

もちろんそれだけじゃない。

普段は考えないようにしていたけれど、呪術高専に入ることになってからずっと心に抱えていて、ふとした瞬間に浮かび上がって虎杖を苦しめていた不安と恐れ――。

「宿讎の指が二十本、ぜんぶ揃った」

瞬間、伏黒を取り巻く空気がピリツと張りつめたのが感じ取れた。

独り言のように漏らす言葉が、珍しく少し震えている。

「まさか……そんな、……すべて揃うなんて」

宿讎の指は簡単に見つからない、全てを揃えることなどほぼ不可能に近い――、というのが一般的な見解であって、だからこそ虎杖の秘匿死刑は無期限延期、つまり「ほぼ無効」であったのだ。

「うん。意外と早かったねーって、五条先生も笑ってた」

器である虎杖自身が、力を早く取り戻したい宿讎のレーダーになって指が見つけ易くなる。そう言っていた五条が正しかったわけで。

「あの目隠し馬鹿が……」

伏黒は忌々しそうに舌打ちした。それでも動揺した様子を見せたのはほんの一瞬だ。なるべく深刻な雰囲気にならないようにと努める虎杖に気づいたからだと思う。

「でも、秘匿死刑にはなっていないし、執行予定も立てられていない、——違いますか？」

「……うん。今のところ、執行される予定も様子もないよ」

虎杖自身を取り込んだ宿讎の指が十二本、そして高専側が所有している指が八本。

虎杖の秘匿死刑執行は、宿讎の指の二十本全てを虎杖に取り込ませてからでなければ意味がない。但し高専上層部は、虎杖に指を取り込ませることを躊躇っている。全ての指を取り込ませ、両面宿讎という史上最悪の呪いの王をこの世からさつさと消してしまいたいと考える一方、虎杖という器の中で両面宿讎が「完成」した時起こりうる最悪の事態を恐れてもいるからだ。

「高専はリスクを嫌います。だから——」

「うん、俺が高専の持つてる八本の指を食わされる可能性は低い。まあ、五条先生は食っちゃえて言うけど」

リスクを嫌う高専側が、全ての指が揃う前に虎杖を消してしまおうとする動きもこれまでに何度もあった。もちろん、それを全て回避してきたからまだ生きているわけだが。

「あの馬鹿のことは別として、高専側がそういうスタンスならにも問題はないじゃないですか」

「そう。だから問題は『俺自身』なんだよね」

自分が宿讎の器だということを普段から常に意識して生活していたわけではなかった。五条の言っていた「地獄」に進む覚悟など、初めて宿讎の指を飲み込んでから十一年経った今でもできていたとは言えない。秘匿死刑など実際に執行されるわけではないと思っ

る部分もあった。
なのに取り込む宿讎の指が増えるにつれ、時が経つにつれ、元々はなにもなかったはずの術式が自分の体にどんどん刻まれていくのがわかるのだ。

「俺、伏黒を一度殺しかけただろ？ えーと、今のおまえにとって是一年と少し前ぐらいのことかな」

「あれは宿讎がやったことで、虎杖のせいじゃ——」

「うん。でも俺が弱かったから体を支配された。制御できなかった。指三本であのザマだったんだ……。今あの時と同じようになつたらと思うとゾツとする」

取り込む宿儺の指が増えるたびに増した不安。

あれから呪力コントロールの仕方にも訓練したし、体も鍛えた。自分は強くなったと思う。ただ、当たり前だが宿儺の力もほぼ完全に近い形に戻り、強くなっている。

「だから——」

「残りの指八本も取り込んで、秘匿死刑を受け入れる、と？」

「いやっ、受け入れた方がいいのかなあ……って話で！ 覚悟とか、まだぜんぜんできてるわけじゃなくて！」

祓われる覚悟などできていないのに、宿儺の力が日々強くなっているのを感じる。なのに宿儺を制御できずに大事な人間を殺しかけた記憶は何年経っても消えない。

情けない話だが、焦りばかりが強くなって、どうしていいかわからなくなったというのが正直なところだ。

それを誰にも言えずにテンパっていた二十六歳の自分が、今ここで十六歳の伏黒に言っても仕方ないだろう……と頭を抱えかけたところで、「よくわからないんですけど」と伏黒が苦笑いをした。声音は予想外に明るく軽い。

「それで、俺と別れる必要がどこにあるんですか？」

「えっ？」

「秘匿死刑を受け入れるって決めたわけじゃないみたいだし、第一、高専側が指をすんなり渡すとは思えないし、十二本の指を取り込んでいても宿讎を制御できてるんですよ？それで俺と別れる必要って、ありますか？」

「……え？ あれ？ そんな軽いノリの話だっけ……？」

深刻な空気にならないようにと努めてはいたが、一応、虎杖の生死に関わる話——のはずである。苦笑いしながら軽い口調で進めちゃうの？ と目を瞬かせていると、今度は伏黒の方が、虎杖の反応こそ心外だとばかりに顔を顰めて低い声を出した。

「十年付き合った恋人に捨てられるとか、俺にとつては全然軽い話じゃないんですけど」

「あ、ごめん、それはそうだ……よな」

「そうです。それに、今話してたのは『なぜ虎杖が俺に別れ話を切り出したか』ですよ。はっきり言って宿讎の指と秘匿死刑の話は大した問題じゃないです。理由はさっき言いましたけど、虎杖は死刑にならないし、宿讎をちゃんと制御できているから、です」

「えっ、そうなの?!」

「そうです」

「そ……っか」

伏黒に断言されるとわりとすんなり納得してしまうのは、やはりもはや虎杖の条件反射

か習性のようなもので。

「ついでに言うと、虎杖はごちやごちや考えちやダメなタイプだと思います」

「いや、うん、それは俺もそう思う」

駄目押しされてもうなんの反論もできなくなった。

また自分が暴走したらだとか、秘匿死刑を受け入れれば……だとか、いくら考えても意味のない万が一のことを、独りでごちやごちや考えすぎてテンパった結果がこれである。

「結局さ、五条先生が言った『初心に帰れ』って、十六の伏黒に説教されてこいつてことだったの？ ちよつと俺、情けなさすぎない？」

「いえ、たぶん、そういうことじゃなくて」

伏黒はベッドの縁から立ち上がり、また苦笑いしながら近づいてきて椅子に座っている虎杖の目の前に立った。

「二十六の俺は、今の話をちゃんと聞きましたか？」

「……いや、俺の話の切り出し方が悪かったんだと思うけど、伏黒めちやめちやキレちやつて、話し合いにはならなかった」

「じゃあ、これ、やったの俺？」

伏黒の指先が左頬に薄く残っている痣をそつと撫でるように触れる。

「あはは。めっちゃいい右ストレートだった！」

「頭に血が上った二十六の俺じゃ話し合いにならないから、十六の俺に話聞かせてこいつでことじゃないですかね。なんで十六の俺なのかとか、二十六の俺まで飛ばされてきた理由はわかりませんが。まあ、五条先生のやることは元々よくわからないですし」

「ん……。そうかもね」

最終的にまた「五条のせい」ということで落ち着いてしまったが、まあいいだろう。

戻ったら先生にお礼を言わなくちゃ（意味はわかんなかったけど！）、そして伏黒には土下座の勢いで謝って許してもらわなきゃ！と戻った後のことを考えてそわそわしていると、十六歳の方の伏黒が虎杖の頬を両手で挟んで上向かせた。見るからに不機嫌な表情に戻った伏黒とがっちり目が合う。

「言っておきますけど、俺だってもう簡単に殺されそうになったりしないですから。未来の俺、強くなってるでしょう？」

十一年前のあの時のこと、伏黒の目の前で死んだ時のこと、生き返った後のことをちゃんと話し合ったことはないが、虎杖の中で消えない記憶となっているように、伏黒の中にも痕が残ってしまったているんだろう。ただ、負けず嫌いなこの台詞は本当に伏黒らしい。

「うん、強いよ。俺を祓うことになるとしたら、五条先生か乙骨先輩か伏黒かな」

「ああそうですか。じゃあ俺じゃなくて大好きな五条先生に被ってもらえば？」

「ええー？ 大好きとかそういうことじゃなくてさー。いちおう『最強』じゃん、あの人」
そりやまあ嫌いじゃないけれども。なんと言っても最強なんだからまず五条先生が候補に上がるし乙骨先輩の名前も出したじゃんくと当たり前の言い訳をしようとして……、怒っているというよりは悔しそうな、ちよつと拗ねているような伏黒の表情に気づく。

——うっそ、マジか。

「……やきもち？」

「あんな胡散臭い男に虎杖は懐きすぎだろって言ってるの」

「やきもちだー」

昔も今も五条に対して伏黒の当たりがキツイのはそのせいか！（いや、恐らくそれだけではないが）とテンションが跳ね上がった。鼻歌を歌いだしたくなるのを堪えて目の前の伏黒の腰と膝裏に腕を回し、横抱きして膝の上ののせると、目を見開いてめちやくちや驚いたようにまじまじと顔を見られる。

「え、なに？」

「……だって、あまりにも自然に膝にのせたりするから……」

「えっ?! まさかこの時の俺とおまえてまだ——」

「いえ、一通りのことはしてますけど」

「あ、そう」

なんとなく微妙な気持ちで苦笑いを零すと、体勢が不安定だからか、肩に縋りつくように両腕を回してきた伏黒が（ニヤけるのは必死で堪えた）今度は不思議そうに首を傾げる。「ずっと気になってたんだけど」

「なに？」

「虎杖って、あ、十六の虎杖の方、今年に入って裏山に行く回数が増えたのってなんでですか？ 今日も行ってるって言ってましたよね？ せっかくふたりとも任務がない休日でもゆっくりできると思ってたのに」

その質問に十六歳の頃の記憶を辿る。付き合いだした時期や切欠の記憶はあやふやになつてはいたけれど、その質問の答えだけはすぐに思い出せた。

「……………ふたりきりになると無茶しそうでヤバかった……………から。頭冷やして体を鎮めるために……………」

「あはは、なんだよそれ！ ていうか虎杖、どんだけ俺のこと好きなんだ」

いつもの仏頂面じゃなくて、弾けるようにはしゃいだ可愛い笑顔に思わず見惚れた。

「すげー好きだったよ」

「過去形？」

「十六の時も、もちろん二十六になっても好きだよ」

満足そうに弧を描いた唇に、吸い寄せられるように口づける。

軽く触れるだけのものに留めておいたが、咎めと揶揄いを混ぜたような顔で笑いながら伏黒は言った。

「それで結局俺と虎杖は十年も続いているんですよね？ それってもうかなり強い縛りの呪いでしょ？ 今さらそれを解呪しろって、そんなの二十六の俺が納得するわけないよ」

「はい……」

「まだ別れたらいつて思ってます？ こっちにも痣増やしますか？」

痣のない右頬を撫でながら、伏黒は挑発するように片眉を上げた。

——ていうかおまえ今ほんとに十六?!

「もう思つてないよー！ ……ほんとさ、伏黒って、なんでそんなカッコいいの」
「捨てようとしたくせに」

「ごめん〜っ」

二十六歳の伏黒への謝罪も込めて、目の前の体を強くぎゅっと抱きしめる。二十六歳の伏黒より少しだけ華奢な体が、頼りないわけじゃないけれど愛おしくて、腹の底から込み

上げてくるものがあつて。当然の反応ではあるのだが、腰の奥の熱もじわりと上がった。十も年下の男に煽られてどうする！と窘める自分がいる一方で、いやいや十年前から伏黒は色っぽかったんだから仕方ない！と強く反論している自分もいる。

——うん……仕方ない。

伏黒を抱きしめたまま立ち上がってベッドまで運ぶ。

マットに横たえられた伏黒は薄っすらと笑みを浮かべながら、自分を組み敷く虎杖を見上げていた。

「……恵」

「って呼んでんの？ 二十六の俺のこと」

「えーと……、まあ、そういう時だけ……」

「へえ」

「ていうかおまえ、なんでそんなに冷静なんだよ。俺ひとりで興奮してすげー恥ずかしいんだけど！ オトナなのに！」

「冷静じゃないですよ。顔に出にくいだけです」

ほら、と、虎杖の右手を取って胸の中心に触れさせる。手の平に伏黒の早い鼓動が伝わってきた。ついでに腰をベッドから浮かせて前部分をぐつと押しつけてきたので、お互い

のソコが硬く反応しているのがパンツ越しにもわかった。

「だ、だからそういうことを……」

「でもまあ、最後まではされないなってわかってる分、余裕はあるかも」

「ん？」

「だって、そろそろじゃないですか？ 戻る時間。もうすぐ一時間ですよ」

ベッドの反対側の壁に掛かっている時計へと、虎杖の視線を促す。

一時間ほどで戻るからね——の五条の呑気な声が脳内に響いて愕然とした。

「うっそマジで?! てことはここで終了?!」

オトナゲなく、そして恥も外聞もなく叫んでしまった虎杖の下で、十六歳の伏黒が艶やかに微笑んだ。

だからさ——、と。

「この続きは二十六の俺にしろよ、悠仁」

□

「つたく……、寒いんだよ。飛ばすにしたって、屋内にしやがれ！」

ほんの数分前まで暖かな部屋の中にいたのだ。十一月の下旬、羽織る物もなしにいきなり屋外（しかも高地）に放り出されて寒さで身が凍んだ。まず悪態しか出てこない。

伏黒が今立っている場所は高専の寮の裏手だ。目の前の、裏山へ真っ直ぐ伸びている小道を登っていけば、通称「展望台」に着く。因みに学生たちは展望台と呼んでいたが、小道が開けた高台の小さな広場から山の麓まで見渡せるだけで、景色を観るための望遠鏡などが実際に設置されていたわけではない。

先ほどまでいた職員室兼補助監督事務室に戻ろうかとも思ったが、そこでまた五条と顔を合わせるのも面倒くさい。

さて、どうしたものか……と辺りを見回していると、突然脳内に「昔」の記憶がふわりと生まれた。

十年前、十六歳の自分の寮の部屋に、二十六歳の虎杖が突然訪ねてきた記憶だ。

この場所に飛ばされる前の「ふたりとも初心に帰れ」という五条の台詞と、今生まれた

記憶によって、自分が十年前にタイムスリップさせられたことをなんとなく理解する。

まあ五条悟のしたことだ。タイムスリップだろうがなんだろうが、今さら慌ても狼狽えもしない。ただ「いつか殴る」の意志がまた強くなっただけである。

——が。

「え、おい、ちよつと待て……」

脳内記憶の虎杖が「二十六の伏黒が十六の虎杖と裏山で会っていた」などと言っている。いや、今まだ会ってねえよ！ 記憶捏造するな！ などと脳内で悪態を吐いていても、虎杖が発言したその記憶は変わってくれない。

こちらに飛ばされてきた二十六歳の伏黒と二十六歳の虎杖の記憶生成には微妙なタイムラグがあるようだが、どうやらこの裏山の高台で二十六歳の伏黒と十六歳の虎杖が会うことは確定のようである。

この記憶、無視したらどうなるだろうか……と一瞬考えたが、未来はともかく過去は変えられないというのが一般的なセオリーなので（さらに過去に飛ばばいいのかもしれないが、それではキリがないので却下だ）、ここで伏黒がどんな行動を取って足掻こうとも、最終的には自分は展望台で十六歳の虎杖に会わなくてはならないのだろう。

「うわぁー、まじかー……」

展望台へと続く小道を見上げ、登り始める前からドツと疲れを感じる。

そしてまた「五条悟、いつか殴る」の思いを新たに、さらに強固にした伏黒であった。

何年ぶりに来たのかは忘れたが、まあそこそこ馴染みのある裏山の小道を黙々と登りながら伏黒は考えていた。

ここに伏黒と虎杖を飛ばす前、五条は「ふたりとも初心に帰れ」などと言っていた。しかし初心に帰るべきは虎杖であって自分ではない。断じてない。

今も自分の脳内に十六歳の「この日、この時」の記憶が新たに生まれ続けている。つまり十六歳の自分が今、二十六歳の虎杖相手にいろいろとやっている（健全な意味で）最中である。

タイムスリップをさせられた原因は虎杖との喧嘩であって、その喧嘩の原因は虎杖だ。

まあ、十六歳の自分が二十六歳の虎杖の話を「ちゃんと聞いてやっている」記憶が新たに生成されるにつれ、一週間前、いきなり別れ話を切り出されたからとはいえ、まともに話を聞かずに殴りつけたのは大人げなかったな……とほんの少しだけ反省し始めてはいるが。

とにかく伏黒の意思是「別れない」であって、それはなにがあらうと変わらない。十六

歳の自分に丸投げするのはどうかと思うけれど、そこはまあ上手くやつてくれるだろう。つまり――。

「飛ばすのは虎杖だけでよかったじゃねえか、あの馬鹿目隠し！」

案外勾配のきつい小道を進みながら、荒くなった息とともに伏黒は再び悪態を吐いた。

ようやく高台の広場に着いて、目的の人物の姿を見つける。

伏黒が声を掛ける前に、近づいてきた人の気配に気づいたのか虎杖が後ろを振り返った。髪のがさが二十六歳の虎杖より少し短い。フェイスラインもまだほんのり丸みが残っている。パーカーを着ているのは昔も今も変わらないが、全体的に「懐かしい」虎杖だ。

まあこの十六歳の虎杖からしてみれば、自分は「知り合いになんとなく似ているオッサン」にしか見えないのだろうが。

挨拶代わりに軽く手を上げて、伏黒はベンチに座っていた虎杖の隣りに座った。その様子を虎杖はずっと見ていたが、物怖じしない性格で好奇心の塊のような男だ、突然現れた知り合い似の男（伏黒本人であるが）を怪しむことも警戒することもなく話しかけてきた。

「えーと、伏黒のお兄さん……ですか？」

「違う。伏黒恵本人だ。但し、年齢は二十六歳」

虎杖はポカンとした表情のまま「……そうですか」と言った。

「因みに二十六歳の虎杖が今、寮にいる十六歳の俺と会ってる」

「へ、へえー……」

「おまえ、理解してないだろ」

「ぜんぜん」

「……」

——即答かよ！

いいのか悪いのかわからないが、虎杖が素直で正直で自分を飾ろうとしないところは昔も今も変わらない。……伏黒にとってはそこが虎杖の好ましいところであるのだけでも「簡単に言うと『タイムスリップ』だな。五条先生の術式で、十年後の俺と虎杖がここに飛ばされてきたってこと。これでわかるか？」

「ああ、なるほど！ ていうか他人をタイムスリップさせるなんてことできるの?! やっぱ五条センサーってすげーな！」

デカい目をきらきらさせて、小さなこどものようにはしゃいでいる。

これもそうだ。昔も今も虎杖は五条悟最真。

かくいう伏黒も、虎杖の「五条悟最真」に昔と変わらずイラっとしてしまう。

ただ一つだけ五条に関して便利な点は、五条悟を知っている者に対しては、科学的に解明されていない現象が起きようが実現不可能だとされている出来事が起きようが、『五条悟の術式のせい』と言えば済んでしまうところである。

そんなわけで今隣りにいる虎杖は、伏黒の言うことをあっさりと信じた。まあ元々疑つてもいないようだったし、伏黒も嘘などは吐いていないが。

「一時間ぐらいで戻れるらしいんだけどさ。とにかく俺は『ここ』で『この時間』を過ぎさなきゃダメみたいだし、その間ちよつと俺に付き合ってくれよ」

「はあ。いいつすよ！」

この時間に飛ばされる前は、体内にドス黒い靄が満ちているようで気分は最悪だったし、こんなところに飛ばされるわ軽い登山をさせられるわでムカついていたが、屈託のない虎杖の表情と態度を前にして途端に心が軽くなった。

「裏山を登ってくるのに結構時間使ったから、実際もうそんなに長話はしてられないんだけど。未来の俺になんか訊きたいことある？」

「え、ききたいこと……？」

キョトンとして目を瞬かせた後、うーんうーんと暫く頭を捻っていた虎杖が、「あつ！」と声を上げた。

「未来の俺って、伏黒より背が高くなってる?!」

「……………」

「いやいやいや……と、脳内で突っ込みながら伏黒は大きな溜め息を吐いた。

背丈のことよりもっと大事なことが他にたくさんあるだろう？ たとえば宿儺のことだとか自分の秘匿死刑のことだとか、大きいことを言えばこの先の呪術界のことだとか——。

しかし期待いっぱいのお腫れで見つめられ、言うべきことを見失った。

この虎杖悠仁という男が、某タイムスリップ映画の登場人物のように、未来の記憶や記録を賭け事などに悪用しようと微塵も考えない善良な人間でよかつたのだ、……きっと。

「背は……もうほとんど同じだな」

「そっかー、同じかー!」

本当は十年経ってもまだ少しだけ伏黒の方が高いのだけれど。純粋な十六歳の男の心に傷をつけるのも忍びない。伏黒は優しい嘘をつけておくことにした。

結局、残りの時間はほとんど世間話に費やした。寮の食堂の鯖の味噌煮は味付けがどうだとかこうだとか、伏黒も十年前は寮にいたのだから今さら教えられなくてもわかっている話ばかりである。

それでも伏黒は、百面相をしながらの、そして身振り手振りを交えての虎杖の話の話を退屈せずに聞いていられた。

しかし――。

ここに飛ばされてきた経緯は腹立たしいものだったが、なかなか楽しい時間だったなあなどと思っていると、虎杖が突然「それでさ」と切り出した。

「なんで未来の俺と伏黒は過去に飛ばされたの？」

「……それ、普通は一番先に訊くことじゃないのか？」

「あ、それもそうか」

そろそろ元いたところに戻る時間だろう。脳内には、十六歳の自分が二十六歳の虎杖から別れ話の原因を全て聞き終えた記憶が生まれている。

恨み言を吐く気はとつくに失せているので、伏黒は事実だけを簡単に教えることにした。

「十年後に別れ話が出るんだよ」

「ん？ 俺と伏黒の間で？」

「そう」

「つまり俺と伏黒、十年も続いてるんだな！」

「論点はソコじゃねえよ」

「あ、そっか。え、別れ話って俺にしたの？ 今から謝っておいてもダメ?! 伏黒の別れの意志は固いの?!」

虎杖自身も、自分が別れを切り出す側だとはまるで思っていないらしい。

あの時の虎杖はそれだけテンパっていたんだなあと、申し訳ない気分が増して、それを汲み取ってやれなかった自分の余裕のなさが恥ずかしくもなった。

「あっちに戻ったらたぶんもう別れ話はナシってことになると思うけどな。とにかく、別れ話で大喧嘩になって、見かねた五条先生に『初心に帰れ』とか言って飛ばされたんだよ」「へ、へえ。よくわかんねえけど、ナシになるならいい……のかな?」

「因みに、別れたいって言い出したのはおまえの方だぞ、虎杖」

「はあ? いやいや、それは絶対ないでしょ。ありえない!」

「後で十六の俺に確認してみろ。それで十年後まで是非『別れるなんてありえない』って思っていてくれ。別れ話なんか俺は受けつけないからな」

「おう!」

七つか八つのこどもの頃から、伏黒は「愛ほど歪んだ呪いはない」という五条の持論を聞かされて育ってきた。呪いの厄介さも醜悪さも身に沁みて知っていたから、自分は恋愛などには縁がないと思っていたのに――。

『俺はもう半分呪いみたいなんだから、さらに伏黒に呪われたところであんま変わらな
い。だから気にせず好きなかだけ呪えよ』

虎杖に与えられた告白の言葉だった。伏黒は虎杖のこの言葉に縋って十年生きてきた。
伏黒の呪いがもうどれほど重くなっているのか、虎杖は知らないのだ。

そろそろ戻る、と山を下る小道に向かいかけて、伏黒はふいに立ち止まる。

まだベンチに座っていた虎杖の前に引き返し、あどけなさの残る顔で伏黒を見上げてい
る虎杖にニコリと笑いかけた。

「無茶されても俺は壊れたりしないぞ」

「……………え」

「我慢は必要ないって言ってるの」

伏黒の言葉の意味に気づいたららしい虎杖の顔が、一瞬でぶわりと真っ赤に染まった。

——なんだコイツ。クッソ可愛いんだけど。

目を見開いて慌てている虎杖のパーカー部分を両手で掴み、少し引き上げて口づける。
驚きで開いた唇の合間から舌を滑り込ませ、口内をたっぷり蹂躪してから顔を離れた。

虎杖の顔は相変わらず真っ赤で、涙目になりながら手で口を覆っている。

おいおい。この頃はもう、十六歳の俺と一通りのことは済ませてるだろうが——と、ち

よつと（苛めるのが）楽しくなった。

そして駄目押しして、伏黒はさらに悪いオトナな気分を味わった。

「覚えとけ悠仁。俺、強引にされるの、わりと好きなんだよ。昔も今も」



「おつかえり〜！」

五条の能天気な声で伏黒と虎杖はハッと我に返った。

視線だけで辺りを見回し、伏黒が現状把握に掛けた時間は僅かに五秒ほどだ。

虎杖が事務室に入ってきて、五条の前で言い争いを始めた時と同じ位置のソファに、同じように自分たちは座っている。壁掛け時計の短針だけが、その時よりも一つ分進んでいた。

「キツカリ一時間ですか。そういうところは無駄に正確ですね。遅刻は平気でするくせに」

「えー。もつと長く十六歳の悠仁といたかった？」

「そんなことは言ってません」

「この術式、わりと疲れるんだよねー。だから一時間が限度」

嫌味が全く五条に通じないどころか、虎杖は五条を増長させるようなことを言う。

「タイムスリップとかさー、センサーすぎすぎ！ でも俺もうちよつと十六の伏黒といたかったな〜」

「そうだろう、そうだろう。恵と違って悠仁は昔から素直だね！」

……勝手にやってる。

虎杖と五条の遣り取りを無視して伏黒はソファから立ち上がる。

「俺はもう帰ります」

「定例報告はー？」

「伊地知さんもまだ戻ってきそうもないし、今回はメールで済ませますよ」

「あああ待って伏黒！」

すたすたと出口に向かい始めた伏黒の腕を、慌てて追ってきた虎杖が掴んだ。

「ごめん！」

「別に怒ってねえよ」

「でも俺たち、ケンカしてた……よな？ ……あれ？」

首をこてんと傾げて動きを止める。眉を上げたり下げたり、眉間に皺を寄せたりと表情だけが忙しく変化して、虎杖が記憶を必死に探っているのがわかる。

「した記憶はあるけど、実際はしてねえな。っていうか、してないことになった、って感じか」

「んー？」

ふたりが十年前に飛ばされたことで未来が微妙に変わったのだ。

頭の中で簡単に状況を整理する。

十六歳の虎杖は、あの時二十六歳の伏黒が言った『別れ話なんか受けつけない』を覚えていた。独りでごちゃごちゃ悩んでいた部分は変わりなかったらしいが、一週間前、いきなり別れ話を切り出したりはしなかったのだ。

一方二十六歳の伏黒も、あの時十六歳の自分が二十六歳の虎杖に言われたことをちゃんと覚えていた。焦らずじっくりと話を聞いてやったわけである。別れ話もなかったわけだから当然キレたり殴ったりもしていない。

結局、一週間前に大喧嘩は起きなかったということ。

その証拠に、虎杖の左頬にはなんの痣もない。

「そっか……、そっか。俺たち、ケンカしてないのか……」

「喧嘩した記憶は残ってるしそのせいで過去に飛ばされたはずなのに、その事実はないとか、ちよつと気持ち悪いけどな」

未だに混乱している様子の虎杖と、状況は理解できたが気分的にいまいちスッキリできていない伏黒。そんなふたりに五条が横から口を挟む。

「まあ、とりあえず丸く納まったんだからいいんじゃない？」

この軽い調子は腹立たしいが、確かに今回のことは五条のおかげだと言えなくもないので、これ以上悪態は吐かないでおく。お札などは死んでも言わないが。

「じゃあお疲れ様でした。報告書は明日中に送りますと伊地知さんに伝えて下さい」

「あ、待つて待つて、俺も帰るから！」

「おまえは直接報告しないとマズいんじゃないのか？ だから今日来たんだろ？」

「そ、そうだけどっ！」

虎杖はほとんど泣きそうな声を出しているが、ふと視線を下げると、わかり易く反応している股間が目に入った。

——まだ治まらねえのかよ。戻ってからもうわりと時間経ってるじゃねえか。

「……おまえ、過去でなにしてきたんだよ」

「なっ、なにもっ——……てことはないけど、あれはおまえが……、ていうか伏黒は覚えてんだろ？」

「まあな」

そりゃもちろん覚えてる。十年前、二十六歳の虎杖を散々煽って未来に帰したことはついでに言うとして二十六歳の虎杖を帰したそのすぐ後、裏山の展望台から戻ってきた十六歳の虎杖に好き勝手されたのだ。

あの時の虎杖は、二十六歳の伏黒に言われた「我慢しなくていい」に従っただけなので文句を言うつもりはないけれど。

「じゃ、そういうことで」

「そういうことって?!」

「お疲れ〜」

「伏黒っ!」

行かすまいと虎杖が伏黒の腕を掴む手に力を入れる。

「腕痛えよ。自分の力考えろ」

「あ、ごめん。じゃあ、あの、帰りに部屋……寄っていい?」

「なんで?」

「なんで……って、ふしぐろお〜」

虎杖の頭上にぺたりと垂れ下がっている犬耳が見えた気がした。

こちらに戻される前の意地悪な気分が残っていてわざと素っ気無い態度を取っていたが、さすがにこれ以上は可哀想かな、と思う。

自分もわりと、あの時間を引きずっているようだ。

「寮の部屋はたくさん空いてるよ〜?」

ニヤニヤしながら茶々を入れる五条を無視して虎杖の方にちゃんと向き直る。

「続きは二十六の俺にしろって言ったのは俺だしな……」

今は痣のない虎杖の左頬を撫でながら、唇を耳元に寄せた。

「部屋で待ってるよ、悠仁」

廊下に出ると、事務室の中から「ああああもう！」という虎杖の叫び声と五条の大笑いが聞こえてきた。

部屋のインターフォンが鳴ったのは、午後七時少し前だった。モニターを確認しなくても訪問者はわかっている。

伏黒が高専を出たのがだいたい午後四時ぐらい。高専から伏黒のマンションまでゆうに一時間半はかかる。つまり自分が高専を出てすぐに伊地知が事務所に戻ってきたとしても、虎杖が事務作業をする時間は一時間半ほどしかなかったはずだ。今日は数ヶ月分の事務処理を溜めまくった故の呼び出しだったのではなかったか？

「あいつ、ちゃんと終わらせてきたのかよ……」

玄関のドアを開け、顔をちゃんと見合わせる前に飛びつくように抱きつかれた。その勢いでふたりして廊下に倒れ込む。後頭部や背中に痛みや衝撃はなかったから虎杖が上手くカバーしたのだとは思いますが、この突然の襲撃に文句を言おうにも制止をしようにも、唇が塞がれてしまつて声が出せない。

「っ……！ ……んんっ……！」

肉厚の舌が伏黒の口内を荒々しく舐め回す。技巧もなにもない、ただ強引に、しかし確実に官能を刺激する動きだった。

『蝦蟇』

意識が欲で霞んでしまう前に、虎杖の背後で手を組み合わせて脳内で式神を呼んだ。

「ちよ、式神は反則じゃね？」

「……う……るせえ」

蝦蟇の長い舌に拘束されて動けなくなった虎杖から距離を取り、乱れた呼吸を整える。虎杖の呼吸も荒い。但し、虎杖の方は過度な興奮状態によるものだろうけれども。

「放すけど、暴れるなよ？」

「んー……」

「ずっとそのままでもいいか？」

「いやいや。それはカンベンして」

床に座ったまま廊下の壁に寄りかかって虎杖をきつく睨みつけた。さっきまでのキスで足腰に力が入りにくくなってしまうていることは……内緒だ。とりあえず次にどんな攻撃を食らってもすぐ対処できるよう、手を組み合わせる寸前にまで準備してから『蝦蟇』の術式を解く。

靴を履いたままだったことに気づいたららしい虎杖は、その場で靴を脱いで玄関に放り投げた。……なんかもう、無作法を咎める気も起きない。

「おまえ、仕事は？」

「五条先生が手伝ってくれたから早く終わった」

「なんでアイツに借りを作るんだよ……」

後でこれをネタにして盛大に揶揄されるに決まっている。思わず頭を抱えなくなった。

だつてさー……と言いながら、虎杖が四つ這いでずりずりと近づいてくる。本能的に後退りしたくなったのはどうにか堪えた。

「もう、こんなだもん——」

今度はふわりと穏やかに抱きしめられたが、腰の辺りにごりごりと当たる虎杖のその部分はずっとも穏やかではない。……もん、じゃねえだろ。

玄関先で飛びつかれた時から気づいていたが、虎杖の体はいつもよりかなり熱くなつていて、瞳が欲を湛えてぎらついていて。まさに獲物を前にした腹ペコの肉食獣のそれだ。

「おまえ……ここに来るまでに不審者と間違われて捕まらなくてよかったな」

「あー、うん。……あのさ」

「なんだ」

「まだ話、する？　ほんともうヤバいんだけど」

伏黒の背中に回っていた腕の力がギュッと一層強くなる。

あからさまな誘い。デリカシーの欠片もない。でも、我慢しなくていいと言ったのは自分である。

そして、熱も欲も伝染するのだ。

「せめて寝室までは待てよ？ それにお互い、明日も任務があるんだからな？」

この牽制にどれだけ効果があるのかはわからない。噛みつくように唇を重ね合わせたのも、相手の洋服を剥ぎ取ろうと手を掛けたのもふたりほぼ同時だった。

唇を貪り合って纏れ合いながら寝室へと向かう。ベッドに辿り着いた時にはふたりとも、下着とシャツ一枚が引つ掛かっただけのあられもない姿だった。

虎杖の手が荒々しく伏黒の体を弄り始める。もういつぱいいつぱいのくせに。それでも伏黒の体を気遣う様子を見せるのが愛しい。

指が尻の狭間に滑り込んできてソコに触れた時、伏黒は自分からその先を促した。

「も……っ、はい……る」

「え？」

「じゅんび……した、うしろ……」

ベッドに伏せるように体勢を変え顔を隠しながら、羞恥を堪えて事実を告げる。

帰宅してから虎杖が訪ねてくるまでの時間で、伏黒は自分で自分の準備をしていたのだ。きつと部屋に来る頃には虎杖は盛りきつた状態のはずだ。余裕のない状態でちゃんと前

戯を施してくれるとも思えない。直接的なことを言ってしまうえば、臨戦状態の虎杖を受け入れられるようになるまで、大事な部分を充分に解してくれればどうか不安だ……と、そんな風に言い訳しながら。

どんなに切羽詰った状態でコトに及んでも、虎杖がセックスの最中、伏黒に怪我をさせたことなど今までに一度だつてなかったのに。

性急だった虎杖を笑えない。結局自分だつて早く虎杖が欲しかったのだ。

虎杖の指が後孔の周りをゆるりと撫でる。ソコはすでに物欲しげに濡れて、縁が膨らんでいるのがわかるはずだ。指先が窄まりに潜り込む。ほんの少し力を入れられただけで、伏黒の後孔はくちゅんと卑猥な音を立てて揃えた二本の指を抵抗もなく飲み込んだ。

「んっ……」

「なか……、柔らかくてあつたかい……」

緩んでいるソコの感触で、伏黒が本当に自分で準備していたことを実感したからだろうか、首筋に掛かる吐息がさらに熱くなって虎杖の興奮が増したのがわかる。伏黒自身も自分の内壁が嬉しそうに虎杖の指に吸いつくのがわかった。

——ああ、早くソコで虎杖を啜え込みたい、虎杖を感じたい……。そう思ったのがすっかり伝わってしまったようで。

「ふしぐろも？ はやく…したかった？」

その通りではあったが素直に答えられるわけがない。そばにあった枕を抱え込んで顔を埋めたまま黙っていると、背中に覆い被さるようにして体重をもろに掛けられる。……おい。自分の体重考えてくれ。

「重…い」

「じゃあ教えて。したかった？」

「……………」

「恵…………？」

耳元で名前を呼ばれ、ぞくりと肌が粟立つ。指を咥えている部分がギュツと締まった。

「も…、早く…………しろ…って！」

「はは。りよーかい。俺も余裕、ねえんだった」

耳にチュツと口づけられた後、中に深く入り込んでいた指がずりりと引き抜かれる。

「ん…………っ」

ベッドサイドの引き出しからコンドームとローションを取り出し、性器にゴムを装着する。そんないつもの一連の動作の気配を背後に感じてもどかしさが募った。

「いたどり…………」

「ん」

「はやく……」

「わかってる……けど、あんま煽らないで」

後ろから腰を持ち上げられ、尻を突き出すような体勢を取らされる。正気の時なら耐えられないであろう格好だが、今はもうそんなことを気にしてられない。

虎杖の指を失って寂しげにひくつく口に屹先が宛がわれて、そして腹の奥まで一息に貫かれた。

「あああ……！」

「っ……！」

挿入の衝撃で背中がグツと撓る。背筋を通って脳天へと激しい刺激が走り抜けた。臉の裏で白い火花がバチンと散る。しかしいつもなら挿れられた衝撃や抵抗感で少し萎えてしまふ自分の性器が、今日は硬度を保ったままだった。

自分の中が虎杖でみっちり埋められている。圧迫感で苦しいはずなのに、満たされた幸福感の方が強い。

「ふしぐる……、今日あんま保ちそうにない。もう動いていい？」

普段は伏黒の中が馴染むまでジツと動かずにいてくれるのだが、虎杖の方も本当に余裕

がないようで、伏黒の返事も待たずに抽挿を始めた。

抜ける寸前まで引かれた。ペニス、伏黒の弱い部分を刺激しながらまた奥深くまで戻ってくる。始めはゆっくりだった律動が、荒くなる呼吸とともに激しくなっていく。

「ふっ……ん、……んっ……あっ……あ……」

「……すげえ……イイ……ほんと……やばい……」

虎杖の熱の籠った吐息と気持ちよさそうな声が伏黒の情欲をさらに煽る。自分の内部がぐねぐねと収縮して虎杖のペニスを離すまいと絡みついている。激しく腰を揺さぶられて、中のいいところを何度も奥まで擦りあげられて、快感が強すぎてほとんど意識が飛びかけていた。

「ね、ごめん……っ、一回イカせて……!!」

「は……あ……っ、あ……っ……んっ」

突かれるたびに甘えたような声が漏れるだけで、もう返事もまともにできなかつた。虎杖は伏黒の腰を強く掴み、何度も「ごめん」と謝りながら激しい抽挿を繰り返す。

「んっ……ん……、ああっ……!!」

「う……ッ……!!」

最後にガンッと奥を一突きして、虎杖は膨れ上がったペニスをびくびくと震わせながら

射精した。その強い衝撃で伏黒もほぼ同時に精を放つ。伏黒の内部の収縮に合わせ、虎杖は自分の陰茎に残った精を最後まで絞り出そうと緩く腰を前後させる。

「いたどり……」

「あ、伏黒も今イッたよな？」

吐精の瞬間の後ろの反応で、それはまあ大体わかるらしいのだが。

自分本位に動いていた自覚があつて、かなり申し訳なく思っていたらしい。さつさと吐き出した挙句相手のことは放ったらかし——、というのもさすがにマズいと思つているようで、伏黒の性器に触れるため腹側に手を差し入れようとした。……が、伏黒が強くそれを制した。

「触るな……。ていうか、まだうごくな……!!」

「あ……」

性器に触れずに後ろだけで達した後は、体が過敏になつて酷く辛い。これは経験した者でないとはわからない感覚だ。

小刻みに体を震わせながら、伏黒は過ぎた快感の波が去るのをひたすら待つ。

「……抜くのもダメ、なんだよな？」

「あたりまえだ、うごかすなつて言つてる!」

この間にもまだ、虎杖を啞えている部分はびくびくと痙攣を繰り返している。つまりは虎杖のソレを包み込んで刺激しているようなもので。元々虎杖のソレは一度射精しただけで満足できるほどおとなしい質でもなくて。

「お、おい……、いたどり……?」

自分の中に留まっている虎杖のペニスは、未だ充分な硬度を保って存在を示している。不穏な気配を感じて伏黒は背筋を震わせた。

「ちようどいいんじゃない?」

「……なに…? ひっ…ああっ!」

繋がったままの状態で、虎杖は伏黒の体を器用に反転させた。敏感になっっている部分をさらにまた刺激された痛みのような快感と、細身とはいえ男の体をらくらくと持ち上げる虎杖の屈強さと、この後されるであろう仕打ちに対して、驚くやら腹立たしいやら怯えるやらでもうわけがわからない。

「おいっ……虎杖っ……」

「このまま、前から、ね? 俺、恵の顔見ながらしたい」

「や……、まだ……、むり……で……」

「できるよ」

「……ん……っ……」

虎杖の指先が、首筋や鎖骨、胸の尖りを撫で、擦り、腹の窪みを通って下の繁みまで、ゆっくり辿って下りて行く。

欲を孕んだ虎杖の視線と声に、自分の体は勝手に期待して熱の籠った吐息を漏らし、あさましく喉を鳴らす。

「ほら。恵は強引にされんの、好きだもんな？」

俺、ちゃんと覚えてるよ——、と虎杖は雄くさい顔でにやりと笑った。

未来が輝いてたのは虎杖くんだけなような気がしないでもないですが、伏黒くんも虎杖くんのことになると「まあ…しょうがないか」って感じで、イヤではなくって、つまりなんのなんの言ってふたりは仲良し♡で、ふたりの未来は輝いているのかな…と（強引）

うん、でもまあいろいろ頑張れ、伏黒恵 ww

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
少しでも楽しんで戴ければ幸いです。

染（そめ）



ご感想など戴けましたら…(๑▽๑)

未来はととても輝いている

2019.01.27 妖言

発行：しのびね／染（そめ）

印刷：合同会社いこい 日本橋おたクラブ様

Mail : some@emps.mints.ne.jp | Twitter : @so_jj_me

無断転載、一般の方の目に触れるネットオークションやフリーマーケット等への出品はご遠慮下さい。
ご不要の際は廃棄処分をお願い致します。

「未来のあいっ……たち悪くね？」

真面目できっちりしてて、まあちよつと融通が利かないようなところはあるけど、人のことを揶揄ったりできるやつじゃないと思うんだけどな。時は人を変えちゃうのかあ。

そんなことをつらつらと考えながら、虎杖は裏山の展望台から寮へと続く道を猛ダッシュで駆け下りている。

「未来のあいっ……あれで大丈夫なのかよ？」

純粹で正直で見るからに善良なのはいいが、十年経つても全く擦れていない（悪く言うとか成長していない）というのはどうなんだ……。騙されて酷い目に遭ったりしねえのか？ などと心配しながら伏黒はベッドに寝転がっている。

ひと気のない寮の廊下にノックの音が響く。

扉が開き、目の前に現れた相手の顔を見てお互いに思ったのだ。

——俺がいないと、こいつはダメだ……。

手を伸ばして相手の体を抱きしめたのは、ほぼ同時だった。